～幽～

澄川仁人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～幽～

【Ｎコード】
Ｎ８２５９Ｙ

【作者名】
澄川仁人

【あらすじ】
ある日、俺は幽霊の女の子とであった。そいつは幽霊の癖に足があるし、物にさわれるしはっきり言ってわけがわからないところだらけだ。……そもそも幽霊とはそういうものなのかもしれないが。
そんな感じに始まった幽霊の少女と俺のたった数日間の物語。

出会い（前書き）

いやー、はじめちゃいましたね。うん。期待しないで、でもできれば読んでください。

出会い

あなたは幽霊というものを信じますか。もし信じるとしたらそれはどんな姿かたちをしていると思いますか。

……少なくとも、いま俺の目の前にいるような奴を思い浮かべた人はあまりいないだろう……。

「お前は、なんなんだ」

「幽霊だ」

「……」

ここは俺が通っている高校の通学路の途中にある公園だ。そして俺の目の前には。

「幽霊だって言っている。信じないのか？」

「いや、だって普通に見えてるし」

……こんなことを言っている奴がいる。見た目普通の女だ。年齢がわからないから女といったが、まず、女の子といっていい年齢だと思う。まあ、俺と同じ高校生ぐらいだろう。髪型も服装もありふれた感じだ。一応言っておくが、足もちゃんとある。

「見えてるとか見えてないとかじゃなくて幽霊なんだ！！」

「……なあ」

「なんだ、信じる気になったか？」

「精神科行くか？」

「なっ！」

そういってみると女は見るからにぶちぎれ始めた。

……とりあえず現在の状況を整理してみよう。

まず、俺は今日の朝、いつもどうりに起きて、いつもどうりに準備をして、いつもどうりに家を出た。ここまではオーケー。じゃあ次、俺はいつもどうりにいつもどうりの道を歩いて学校へ向かい途中にある公園の前に差し掛かった。ここまでもオーケー。そして、ふと公園のほうを見ると、一人の女と目があった。なぜか知らない

が、目があったこと自体にびっくりしたらしい女はこっちに走って来てこういった。
「私のことが見えるのか？」
……アウト……
そして現在に至る。なんなんだろうな、この状況。
「わ・た・し・は・幽霊なの！」
「なぜそう言い切れる」
「だから、言い切れるとかそういう問題じゃない！」
正真正銘病んでいらっしゃるんだな。……ご愁傷様。
「分かったよ。じゃあ仮にお前が幽霊だとして、俺に何の用だ」
「私は幽霊になってから……いやもういつ幽霊になってそれからどれくらいの時間がたったのかも覚えていないんだけど、とにかく今日なんと神のお告げがあったの。『もうすぐあなたの未練を晴らす時が来ます』って。そしてそれからすぐに私が見える人間と会えたんだ。これで分かるでしょ」
そうか、そうか、そういうことか。
「耳鼻科がご所望か」
「ちがーう！」
「ほら、行くぞ」
俺は女の手を掴んで……掴んで……ってあれ？
「は？な、なんで？」
なんと俺が女の手をつかもうとすると見事に（？）すりぬけたのだ。
「く、この、おりゃ！」
何度も女の手を掴もうとするが、いくらやってもすり抜けるばかりで、一向に掴めない。最終的には飛びつこうとするが、結局すり抜けて勢い余って地面に転がってしまう。
「ああ、ごめんごめん。これでいいんだよね」
女がいとも当たり前というように俺の手を掴んで起こそうとする。
「うわあああ！」

俺はすさまじい勢いで手を放す。
「何で驚くの？自分から掴もうとしたのに」
「そ、そ、そりゃそうだろ！急に掴まれたんだから」
な、何なんだこいつ。本当に幽霊だっていうのか。
「ああ、分かった分かった。さっき掴めなかったのに、いきなり掴まれたから驚いたんだね」
そりゃあ驚くわ……
「何でか知らないけどねえ、こっちが触りたいっ！て思うとさわれるんだよねえ」
なんじゃそりゃ。俺は疑惑を感じながらも自力で立ち上がる。
「とりあえずお前が幽霊だってことは信じよう」
「信じてなかったの！？」
「当たり前だ」
「ぐぬぬぬぬ」
なんかやっぱり幽霊っぽくないやつだな。
「そういやお前、名前は？」
「分かんない」
「分かんない？」
分かんないってどういうことだ。
「分かんないものは分かんないから分かんないの。そんで、あんたの名前は？」
「高峰卓也（たかみねたくや）だ。そうだな、お前、って呼ぶのもなんだから、幽霊からとって幽（ゆう）って呼ぶぞ」
「幽？」
「なんだ？嫌か」
嫌なら霊（れい）っていう手段もあるな。
「いや、なんか……聞いたことがある気がして……なんでだろ」
「ま、なんででもいいだろ。ってうわあ！」
し、しまった俺としたことが。
「どうした！？」

「遅刻するーーー！」
健全な高校生として無遅刻無欠席が、売り（？）の俺として、遅刻はあるまじき行為！っつうわけで走る！
「お、おい！待て」
……何だろう。こうして町中（まちなか）を走るのは久しぶりな気がする。俺が住んでいる町は大して都会じゃないので、ちっちゃいころは良く走り回ってたっけ……もちろん一人じゃなくて友達と……あれ、誰だっけ？敦（あつし）に健斗（けんと）に隼人（はやと）は思い出せるけど……一番仲の良かった奴はずの奴が……まあ、いいか。それにしても変わったもんだ。俺が小学生の頃とは全然違う。町も、そして友達の顔も……

出会い（後書き）

実は第二話ももう書きあがっています。

不自然な幽霊

「ぎりぎりセーフ」
何とか教室についた俺は、自分の席に着く。……つーか
「何でお前はこんなところまでついてきてんだ……幽」
「何でってさっきも言ったでしょ。私が見えるんだからたっくんは私の未練に関係があるんだって」
いや、まあそうなんだが。名前付けといてほったらかしもないしな。……そういや
「いきなりあだ名なんだな」
「なんか前からこんな呼び方してた気がする」
「は？」
前も何も俺たちは初対面のはずだが。
そんなことを考えているうちに俺が後ろからの急な不意打ちにあった。
「た・く・やーーーー！」
バゴ！
「おふ！？」
「は、は、はーーー珍しいじゃないか卓也、俺より遅く来るなんて。それなのにこの俺にグッドモーニングの挨拶も無しにあろうことか空中と話しているなんて！」
こいつの名前は池口(いけぐち)隼人だ。さっき回想にちょこっと出てた。勉強そこそこ運動もまあまあのギャルゲー大好きの典型的な高校生だ。
「おい、今めっちゃ失礼なこと考えてなかったか？」
「何のことだ？」
「とぼけるなよ。まあいいか」
とりあえず隼人は納得したらしい。……そうだなんなら。
「お前、こいつが見えるか？」
俺は幽のほうを指す。

「は？何言ってんの何も無いけど……」
なるほど、俺は幽に目配せをする。すると幽はどうやらその意味を正確に受け取ってくれたらしい。
「う、うお！？何だ？」
幽は隼人の肩にそっと触ったのだ。どうやら触られたのは分かるらしいが、姿は見えないということらしい。
隼人はいまだきょろきょろと触った主を探している。とりあえずごまかしておくか。
「マジック」
「は？」
「だから、今のはマジック」
さすがにマジックは無かったか。幽も「それはない」と言っている。（隼人には声も聞こえないらしい）だが、隼人はどうやら信じたらしい。
「なんだよ、マジックかよ。それならそうと先に言えよ」
そう、言い忘れていたが、隼人は正真正銘馬鹿なのだ。
「やっぱおめえ失礼なこと考えてるだろ」
ちょっとだけ人の心を読むのがうまいけどな。
「考えてねえよ」
そういうと隼人はすさまじいため息とともに話題変更を試みた。
「はあ……っまいいけどさ。俺なんかどうせお前とは違って先輩方にこってり絞られたかと思えば今度は干されてばっかの日々だからなー」
隼人はサッカー部に所属している。話の内容から分かったと思うが、俺たちは一年だ。
「少しは乾いたか？」
「そういう意味じゃねえ……。とにかく俺はお前がうらやましいんだよ」
「どうして？」
「どうしてもこうしてもお前は毎日神崎（かんざき）先輩と二人っきりだからだ

よおお！」
　ああ、そういうことか。
「確かに二人っきりだな」
「くそ！くそ！俺も『オカルト研』に入れば良かった。そうすればお前なんかは押しのけて俺が神崎先輩とお近づきに……」
　神崎先輩というのは神崎綾女（あやめ）という三年生の先輩のことである。変人ということで有名で、学校非公認の部活として二年のころからこっそり空き教室を使って『オカルト研究会』というものをやっている。一応は帰宅部ということになっているし、非公認であるからそもそも勧誘などできるはずもなく、それでなくてもその存在すら知らない人がほとんどなので、文字どうり一人っきりだったわけだ。そんで三年になってからさすがに寂しくなったらしく一緒にわけのわからない研究をやる人を探していたらしいが、この高校は部活動が盛んで一年生では俺を除いて全員がさっさと部活に入っている。二年、三年も同じようなものだ。まあだからというか、たまたま部室にしている空き教室の前を通り過ぎた俺を無理やり連れ込もうとしたわけだ。もちろん断ってやったが、最終的に土下座してきたんでまあとりあえずは部員になってみました。みたいな感じだ。
　ちなみにそこそこ外見はいいので、ごく、ごく、ごく一部の男子に人気がある。隼人はその残念な一人というわけだ。基本はみんなに気味悪がられている人なので、それに寄り付く人もよほどの物好きなのかもしれない。
「あの人のどこがいいんだ」
「すべてだよ！」
　お前はアイドルに群がるファンか？
「もういい。ホームルーム始まるぞ」
「覚えてろよ」
　……何をだ？
　隼人がしぶしぶ自分の席に戻ると、幽が話しかけてきた。
「なんか……元気な人だね」

「あいつから元気を抜いたら何も残らねえよ」
それから少しだけ他愛の無い話をしているとホームルームが終わり、授業の時間が来た。
教師がすらすらと数学の問題を黒板に書いている。そこでふと思いついたことがあったので、いまだ傍らにいた幽に聞いてみる。
「なあ」
「何？」
「お前黒板の問題、解けるか？」
幽はしばらく……と言えるほど考えずに頭をぶんぶん振りながら答えた。
「無理」
「即答か」
「だって全然分かんないもん」
全然分かんない……か。見た目高校生ぐらいだから死んだのもそのくらいだと思ったが、全然分かんないとなると……どうなるんだ？馬鹿だってことでいいのか？
それから授業中何度か幽に問題を出してみたが、全く答えられ無かった。知能レベルが中学生の分もあるかどうか微妙だった。というかないと思う。

幽霊の特権

すべての授業が終わり、従って昼食も昼休みもすべて終わっている放課後。俺は廊下を歩いていた。もちろん部室に向かっているわけだ。

幽がいるのはいいとしてなぜか隼人も一緒にいる。

「おい、なんでお前もいるんだ」

隼人がなぜか得意げに答える。

「そんなもん神崎先輩に一目お会いしたいからに決まっているだろ」

「本当にお前は……」

物好きだなあー。

「あ、なんだよ！その顔は！悪いか！？」

どうやら呆れが顔に出てしまっていたらしい。

「いや、悪くないけどさ」

そうしてくだらない話をしながら廊下を歩いてると、前方から三年の男子の集団が現れた。……いや、急に現れるはずもなく、普通に歩いてきただけなんだが。

「し、しまった！見つかったー！ちくしょー！#$%#&$$！？」

隼人が急にあわてはじめ、わけのわからない言葉……もとい悲鳴を上げ始めた。

「おい、池口！なんでこんなところで遊んでるんだ！」

集団の中の一番がたいのいい男が声を張り上げた。

「は、はい！キャプテン！」

隼人はほとんど条件反射かのように姿勢を正して返事をした。

「今日の準備は全部お前に任せたはずだよなあ！」

「はい！」

おいおい……話の流れからして隼人が準備をさぼったらしいことはわかるが、一人はつらいだろ、一人は。俺は目の前のほとんど壁のようにして立ちふさがっているキャプテンらしい先輩に聞こえな

いように隼人に耳打ちをした。
「なんか、お前も大変そうだな」
「……変わってくれ」
「無理だ」
「おい！何話てんだ！行くぞ」
先輩はそういうと隼人の頭を軽く殴った後まさしく首根っこをつかんで引きずりながら歩き始めた。
俺がその場面をぼー然と眺めていると今まで黙っていた幽が、なんと男の足を蹴り上げた。
「なんか分かんないけどちょっとひどいんじゃない！？」
しかし幽が張り上げた声は先輩にも、ましてや隼人にも聞こえるはずがなく、ただむなしく俺の耳に響くだけだ。そして、蹴られた先輩が、隼人を放し、振り向いた先には……何たる偶然、俺がいるわけだ。悲しい……こんなにも悲しいことがあっていいのだろうか。
「おい、今蹴ったのはおめえか？一年坊の癖にいきがりやがって」
さて、どうしようか。不思議と俺は落ち着いていた。いや、なんとなく幽の性格からして想像ができていた。この状況になることは。それじゃあまずはしらけるところから始めよう。
「違いますよ」
隣の幽霊です。と付け加えなかったのは我ながら良策だったと思う。が、やはり想像どうり第一陣はあっけなく突破される。
「なわけねえだろ。お前しかそこにいないんだからよお」
先輩はいまにも殴りかかってきそうな勢いで近づいてくる。隼人はなんか困惑した目で俺を見ている。困惑したいのは俺だよ。まあとりあえずは次の一手を打つとするか。もちろん次の一手というのは……逃げだ。
俺は体を１８０度反転させて走り出す。……いや出そうとした。だが、その前に思いがけないことが起きた。
「げふ！？」
いきなり俺に殴り掛かって来そうだった先輩が、床と抱擁を交わ

したのだ。いや、普通に言おう。幽に足をかけられて思いっきり転んだのだ。さすがにこの光景には隼人やほかの先輩方も驚きを隠せないでいた。何せ何もないはずのところで急に何かに引っかかったかのように転んだからだ。

「ざまーみろ」

そんな下品な言葉を言ったのだもちろん俺でなく幽だ。でも、その口調からはその言葉の本来の意味は感じ取れない。むしろ心の底からこの状況を楽しんでいるようである。

「くそお……てめえ！」

なんかあちらさんはとってもご立腹のようで、奇跡的に幽霊と会話が成立したように見えたのは偶然ではないように思える。

そんなことを考ええいるうちに先輩は素早く立ち上がり今度こそ俺に殴り掛かってきた。……が、まあここまで来ると展開が手に取るようにわかる。見事に幽のカウンターパンチが決まり、（幽霊相手にカウンターパンチもないと思うが）先輩は本日2度目の床との抱擁を果たした。完全に伸びてしまったようだ。

「せ、先輩！？」

この状況で一番に動いたのは隼人だった。すぐに先輩の安否を確認……はせずまっすぐに俺のほうに来て、開口一番こう言った。

「何したんだよお前」

この質問が来ることはわかっていた。だから先に用意してあった返事を繰り出す。

「マジック」

「……めちゃくちゃ物騒なマジックだな」

この状況でまだ信じる隼人のことを馬鹿と言っては馬と鹿が可愛そうだ。

俺は幽と一緒にさっさとその場から退散する。いつのまにか集まっていた野次馬の視線がとっても痛かったが、幽を怒ろうにも俺からは殴ることも蹴ることもできない。にしてもあんなことで起こるなんて、小学生かなんかかよ。

神崎綾女という人

「さて、今日もついてしまった」
幽が俺の顔を覗き込みながら話しかけてくる。
「たっくん、来たくなかったの」
まあ、そういうことになるだろうか。
俺は今とある空き教室の前にいる。いや、もはやとあるという言葉は大して意味はなさないだろう。ここまで来たからにはこの教室が例の『オカルト研』の部室であることが明明白白であるからだ。
「さあ、今日はどう出てくる」
「そこまで警戒が必要な人なの？」
「一番ひどかったのは水が降ってくるトラップだった」
確か神崎先輩は寂しかったから俺を勧誘したといったことがあっただろうか。だが正確にはそれは違った。神崎先輩の土下座はつまり実験台（じっけんだい）がほしかったのだ。
「……ひどい人だね」
ガラ。
俺は意を決して横開きの扉を開ける。……が特にトラップの類は無かった。しかしこの空間に問題があることは確かだった。
「なんじゃこりゃ」
教室の中は大して問題があるわけじゃない。ただ、その一角、教卓の上に無数の本が積み上がった山があるのだ。
……はあ、今日も手ごわそうだ。さっさとこの空間から出て行きたい衝動を抑えながら俺はその山の中にいるその山を積み上げた主に声をかける。
「神崎先輩。今日は一段とわけがわからないですね」
「ふ、他人にわけが分かるようなことをやっていては人はいつまでも進歩できないのさ」
そういって神崎先輩は自慢らしい自分の長髪を撫でる。……本当

に、見た目だけならまだ何とかなるのになあ。
「どうした？入ってこないのか？」
「あのですねえ……」
そこでいったん言葉を区切り、もう一度空間内を確認する。神崎先輩は教卓を黒板にくっつけるようにして置き、黒板を背もたれにして体育座りのようにして本を読んでいる。何を読んでいるかはここからは見えない。というか興味ない。とにかくこの状況で俺が教室内に入って先輩と向き合ったらどうなるか……ちなみに先輩のスカートはさほど長くない。
「見えますよ」
まさしくきょとんとした様子で神崎先輩が答える。
「何が？」
……ざけんな。
「本気で言ってるんですか？」
そこでようやく神崎先輩は気付いたらしく。自分の足元へと視線を送る。が、教卓から降りるわけでもなく、姿勢を変えるわけでもない。
「見えたところでなんだというんだ」
……ちなみにここで普通の返答を返しても意味がないことはわかっている。だからこっちもそれなりにひねった返答を返してみる。
「公然わいせつです」
「六法全書今すぐ読破してきたらどうだね」
「無理です」
ここはのり突っ込みでスルーされる。会話の中に常識と非常識が織り交ぜられるのは相手としてはとっても困る。
でも、それによって神崎先輩が教卓から降りて俺と向き合って話すつもりになったのはいいことだ。というわけで教室に入る。
「たっくんの周りには普通の人はいないの？」
そういったのは幽だ。そしてその答えは無情にもイエスだ。が、口には出さない。認めたくない。

「そういえば卓也君、宿題はできたかね？」
神崎先輩はたまに俺に向かって宿題を出す。その内容は毎回てんでバラバラで、統一性など皆無だ。確か前のは、ＵＦＯは存在するかかどうか。意見と考察を述べよ。だったはず。もちろん無視した。そして今回のは……
「ええっと何か一つミステリーを見つけてくるでしたっけ」
「そうそう、それだよ」
……あーあ、いつもなら無視するんだけどなあ。こればっかりは。初めてだよ。本当に宿題を出来てしまったことは。とりあえず、話してみるか。
「ここに、幽霊が居ます」
さあ、どう反応するか。この人だからこそ想像がつかない。もしかしたら見えているかもしれない。そんな気がする。
「へえ、面白いことを言うね。なるほど、そこに……」
そういいながら、神崎先輩は俺の隣の幽……一般人にはただの空中に見えるところに近づいていく。だが、残念ながらそっちは逆だ。
「神崎先輩……見えないんですね。」
「ふん、そうか、お前には見えて私には見えないということなんだな」
そういった後神崎先輩は勝手に納得したように頭を縦にうんうんと振った。その光景を見ながら俺はこの状況では一番素朴と思える質問をした。
「疑わないんですか？」
「疑ってほしいのか？」
いや、決してそういうわけではない。
「私はな絶対にそうではないと断言できる証拠がない限り、人の話は疑わないたちなのだ」
「じゃあ俺が嘘をついているといったらどうするんですか」
「それは嘘だと納得するまでだ」
めちゃくちゃ単純な人だな。いや、分かっていたことなんだけど。

でも、言葉はそこで終わらなかった。
「だが、幽霊がいるだけでは怪奇現象ではあるかもしれないがミステリーではないぞ」
んん？怪奇現象とミステリーってどこが違うんだ？というか同じだろう。その諏を神崎先輩に伝えるが、神崎先輩は鼻で笑い、こう答えた。
「そんなもの、気分の問題だろう。とにかくそれだけではミステリーには物足りないといっているんだ。君が珍しく宿題に答えてくれたということは何かあるのだろう」
そう、あるのだ。ちょっとしたミステリーが、間違いのないように幽に確認をとる。その様子は神崎先輩には俺が何もないところと話しているように見えるはずなのだが、それすらも嬉々とした様子で見ていた。
確認が終わったところで俺は話し出す。他人にとってみれば幽霊がいることに比べればくだらないとも思える、ほんの小さなミステリーを

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8259y/

～幽～

2011年11月24日19時52分発行